
結婚依存症の女

マイペンライエリー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

結婚依存症の女

【Nコード】

N0049M

【作者名】

マイペンライエリー

【あらすじ】

風子は一人では生きて行けない女。

関係を持った男とは結婚せずにいられない。

経済的に自立していながらも 精神的には男に依存している。

今日も風子は「本当の男」との出会いを求めて人生を闊歩するのだ。

他サイトと重複掲載を行なっています。

彼のベッドの上で風子は叫んでいた。

「ユージ！結婚しよう！！」

1歳年上のユージは風子と同じ薬科大学の写真部の先輩。

もう付き合って2年になる。

ユージは今年卒業。就職も大手製薬会社に内定していた。

ユージは風子にとって初めてのオトコである。

物腰が柔らかく デートも風子の望む通りにしてくれる。

怒ったり怒鳴ったりしたことは1度もなく、気分の起伏は殆どない。

明るく ゆったりとしていいトコのお坊ちゃんタイプだった。

本当に申し分のない彼と付き合って 風子は幸せだった。

風子は 童顔でいながらもナイスバディの持ち主だった。

そしてSexした以上は結婚しなくちゃ倫理に反すると思い込むタイプのオンナだった。

おっとりしたユージは完全に主導権を風子に握られていた。

お互いの両親は結婚に反対する理由もなく 風子の卒業と同時に結婚する事を認めてくれた。

そして風子は翌年順調に卒業し、ユージと晴れて結婚した。

彼女もまた別の大手製薬会社に就職した。

共働きだったので 朝別れて仕事場に行き、夜一緒に食事をして眠る、

それは恋人時代と同じリズムで ふたりは結婚生活に満足していた。

しかし 次第に研究職のユージは毎晩遅く 食事も外で済ませて来る事が多くなり、

生活時間帯も変わってきたので二人で会話する時間が自然と減っていった。

風子はだんだん不満が募って来た。

「食事も別々、会話もない夫婦って一体一緒にいる必要がある？」

「ユージ！ わたしたち別れましょう！ 意味ない結婚だわ！」

かわいそうにユージの意見も通らないまま、風子は離婚届に判を押すとさっさと実家に帰って行った。

離婚の主導権も風子に握られたまま 結局二人は離婚した。

風子は今まで通り製薬会社で働いている。

仕事は充実していたが、風子は一人では寂しくて生きていけないタイプだった。

となりの研究室に 少し気になるオトコがいた。

研究員にしては少しおしゃれなタイプの細身のオトコだった。

髪の毛を伸ばして少しパーマをかけカールさせている、きっとそうだ！自毛のくせ毛では決してない。

前髪を目にかかるまで長く伸ばし 常に髪をさらさらさせて女子にアピールしている。

「僕はかっこいいでしょ！」みたいに。

そのくるくるパーマのオトコ ヒロミが ことある毎に風子のいる研究室に来てゴルフの自慢話を皆にしている。

何度も視線を風子の方に向けるので 風子は自分に気があるのではないかと確信した。

そして社内のゴルフ大会の予告で コースをまわる同じメンバーにヒロミの名前があるのを知った風子は 早速 ヒロミにゴルフの個人レッスンをお願いした。

ヒロミは喜んで承諾してくれ、 打ちっ放しのゴルフ場で手取り足取り教えてくれた。

その帰りの車の中で 風子からk i s sをした。

こういうオトコは自尊心が強過ぎて 自分から迫れないのだ。それを直感的に知っている風子だった。

体の関係になるのはあつという間だった、風子のもくろみ通りに！

3ヶ月ほどお互いのマンションを行き来して

ある日、風子お手製のアップルパイ（ヒロミの大好物！）を丁寧に
入れたコーヒーと共に頬張って満足そうなヒロミに向かって 風子
は上目使いで甘える様に言った。

「結婚したら 毎日美味しい御馳走と大好きなケーキを作ってあげ
られるのにナ。」

風子はお料理学校に通いお菓子作りも得意だった。それもこれも誰
かと結婚する為のアイテムとして！

超々甘い物好きのヒロミはこの言葉に心は決まった。

バツイチの風子だが 早くに母親を亡くしていたヒロミは 風子の
母性溢れる（ように見えた）言動にもうメロメロだった。

二人はめでたく結婚した。

結婚式は ナルちゃんのヒロミにとっては重要で イタリアの小さ

な教会で執り行われた。

真っ白いタキシードを着て　花びらの道を歩くヒロミは人生で一番
幸せだった。

感激の涙にむせぶ新郎を横目に　風子は2度目のウェディングドレスの長い裾を踏まない様に歩くのが大変で　結婚式の感動は後回し
になっていた。

それでも誓いの言葉の場面ではこれからの幸せを夢見て涙ぐむ風子
であったが。

日本に帰ってきて　いつもの日常生活が始まると　とたんにヒロミ
のナルシストぶりが鼻につき始めた。

夜寝る時には髪に　カーラーを巻き　朝　洗面所の前で1時間も髪
をなでまわす。

出掛けに洋服を取っ替え引っ替え鏡の前で合わせては　なかなか決
まらず時間をかけて　遅刻しそうになっている。

風子は待っていられず　呆れて先に出勤するようになった。

山のようなヒロミの洗濯物に山のようなヒロミのおしゃれシャツの
アイロン掛け？　？　？

風子は嫌気がさしてきた。

一番イヤだったのは 使っているオーデコロンの匂いだった、床屋のオヤジの匂いだ。と風子は思っていた。

いくら別なオーデコロンをプレゼントしても ヒロミはその床屋の匂いの方が好きみたいで いつの間にかその匂いに変わっているのだ。

「わたしたち やっぱりお互いを知る時間が短か過ぎたわ。別れましょう。」

かわいそうにヒロミは風子のマニユフェストであった、美味しいケーキを毎日作ってあげる、をろくに実行してもらえずに 離婚する事になったのだった。

ナルちゃんオトコと離婚してから その製薬会社を辞め 薬剤師として個人病院に勤めながら 語学学校に通っていた風子はもう35歳だった。

そこでドイツ語の先生 ヴアルデマールのパーティーに出てミハエルと知り合った。

ミハエルは気功の先生でもあり 各国で天然石のアクセサリーを作って売る仕事もしていた。

風子は ミハエルの容貌に一目惚れした。

端正なマスクに綺麗な青い瞳、少しカールのかかった金髪。おはなしの中の王子様そのものだった。

3歳年下だが落ち着いた雰囲気は さすがドイツ人。

早速 風子は覚えてたのドイツ語で話しかけ 言葉に詰まると英語とドイツ語と日本語のチャンポンでなんとかデートに漕ぎ着けた。

ミハエルはとても優しいオトコで大きい体に似合わず子どもが大好きだった。

風子はミハエルの為に 今迄の貯金をはたいて子ども語学教室を開設した。

目標が定まると猛烈に真っ直ぐ突き進むタイプのオンナだった。

恋人が外国人の場合 語学の習得はもの凄く早い。

風子は英語もドイツ語もみるみるうちに上達した。

英語もドイツ語も教える教室ということで 子どもも大人も大勢習いに来て大繁盛だった。

土曜日には ランチ付きのパーティー。

パーティーには必ずミハエルの在日の友達が来て、各国語が飛び交って楽しかった。

さらにボーリングパーティー。

夏には ミハエルの友達の別荘でバーベキューパーティー。

冬には温泉で友達のマジシャンを呼んでパーティーと、楽しいイベントは人気に人気を呼んで大賑わいだった。

起業は大成功。

そこで二人はみんなに祝福されて結婚した。

しかし婚姻届けは色々煩雑だし、時間がかかる。しかもドイツの両親は風子が日本人ということで大反対している。

ミハエルの「ペーパーはどうでもいいじゃないか、僕たちの愛さえあれば。」という甘い言葉に

結局事実婚のみで婚姻届けは出さなかった。ま、それで結局結果オライだったんだけど？？？

暫く繁盛していた語学教室もパーティーのサービスのしすぎと新規生徒の獲得に苦戦して だんだん経営が傾いてきていた。

それと同時に ミハエルはドイツで気功の先生として活躍し始め本も出版し、ドイツの地方講演等で忙しく飛び回る様になり だんだん日本に滞在する期間が短くなっていった。

語学教室は事実上閉鎖となり 1人日本に残された風子はドイツまでミハエルに逢いに行ったが、そこで驚愕の事実を知った。

なんとミハエルは妻子あるオトコだったのだ！ ？ ？ ？

「うっそ〜！ 信じられな〜い！！！」

傷心で帰国した風子は 不埒なエイリアンオトコを忘れる為に仕事に没頭した。

しかし 誰かと一緒にいないと寂しくて切なくて夜が来るのが怖かった。

そんな時 知り合いのおばさんから お見合い話が飛び込んで来たのだった。

「やっぱり紙切れ1枚とはいえ形式は大切なものなのよ！

あの時 必要な事をちゃんとしておけば、あのエイリアンオトコの素性もわかったのに！！」

と思うと悔しかったが 戸籍を不必要に汚さなかった事は 結果オライだったかも知れないと自分を納得させた。

風子はポジティブシンキングなオンナでもあった。

さて紹介されたお見合い話。

相手は地方に济む 大手商社の会社員。

48歳で独身 初婚だった。 母と2人で住んでいる。

経済面では要望をクリアしている。

「48歳で初婚。お母さんとね。」 ちょっと不安がよぎったが

「お勉強で忙しい学生生活してたし 仕事に燃えてたから出会いに恵まれなかったんだわ、きっと。」

39歳になっていた風子は何としても結婚して家庭を持ちたかった。

お見合いは 日本庭園が見えるホテルの一室で行われた。

落ち着きたいオンナに見える様 風子は地味目のスーツに身を包み ルージュだけは情熱的な赤を選び装った。

シンイチは顔色の冴えない細身のオトコだった。

せっかく細身なのに スーツは体にフィットしていなくて借り物のように見えた。

口数が少なく 話も途切れがちになったが 風子の持ち前の明るさで何とかなごやかにその場をもたせた。

真っ正面に風子が座っていたのに まともに目を合わせようとしないうオトコに不満があったが、とりあえず

次のデートの約束をとりつけた。

母が言った。

「普通が1番よ。ふつゝの家庭はそんなものよ。 트렌ディドラマの様にはいかないわよ。あとからだんだん好きになっていけばいいのよ。」

はじめてのデートの帰り　また風子からK i s sをしてやった。

アノ時も風子からリードしてやった。

そうしないといつまでも事の進展は見られなかったから。

それが気に入られたのかどうか解らないが　とんとん拍子に事が進んで　目出度く二人は結婚する事になった。

結婚生活は退屈そのものだった。

朝早く出勤するシンイチは新婚であっても今迄通り残業し、帰るのは11時過ぎていた。

大学を出てからずっと仕事をしていた風子は気が遠くなる様な長い

待ち時間が苦痛でたまらなかった。

お料理教室に通ったものの、それを作って出来立てを食べさせる楽しみも 夜11時過ぎのこつてりした食事は胃の負担になって嫌だとシンイチから言われ 急激に作る気が失せてそのうち教室も辞めてしまった。

だから夕食はいつも決まりきった和食で 満足してるのかシンイチは何も言わずに黙々と食べた。

風子は1日中一人で部屋にるので寂しく誰かれ構わずおしゃべりしたいのを我慢してたので シンイチが帰って来ると 爆発したかのようにしゃべり通した。

けれどシンイチは「ああ。」とか「うん。」とか頼りない生返事ばかり。

「これならクッションに向かってわめいてた方が まだましだわ。気に入らなければ投げつける事も出来るもの。」

夜の生活も風子の方から誘わなければ シンイチの方から風子に触れる事はなかった。

それに親孝行息子は 毎週日曜日の朝から母親に会いに行き そこで夕食を食べて夜帰ってくるのである。

風子は最初一緒に行ってたが、何も話す事もなく　ただテレビを3人でぼーっと見てる時間の虚しさに辟易して風子は何かと理由をつけて行かなくなり、シンイチだけ行く様になった。

「ちよつとくく、勘弁してよくく。結婚してる意味ないじゃんくく。」

だんだん元気のなくなっていく風子に体の変調が現れたのは　結婚して5ヶ月目の事だった。

吐き気がする。特にあのオトコの匂いで。

とうとう体にもシンイチ拒否反応が出る様になったか　とは思わなかったが

もともと生理不順な風子だったから　生理が遅れている事を気に留めずにいたが　いささか吐き気が現れてからは　妊娠したのではないかと疑う様になった。

すぐに薬局で妊娠診断薬を買ってきてトイレで試した所　陽性のマークがくつきりと出たので風子は嬉しい反面　あのオトコとこれからも延々と家族でいなければならぬ事に憂鬱な重苦しさを感じるのだった。

どうしてもシンイチの匂いで吐き氣が来るので 両鼻にティッシュを詰め 彼には鼻炎ということにして 暫く事実をふせていたが とうとうつわりが辛くなり 本当の事を打ち明けた。

「ああ、そうですか。」

『エッ！ その反応はないんじゃない？ あんたの子なのに、人ごとみたいな言い方。』

風子はこの時点で もうこのオトコに頼る気持ちは無くなっていることに気付いていた。

「離婚して 一人で産んで育ててみせるわ！！」

しかし実家の両親は 非嫡出子になったらこの子は可哀想と言って大反対した。別れるなら出産してから、と注文を付けた。

風子は泣く泣く 出産してから離婚することにした。

臨月迄の間　風子を労ってくれる事なく　マイペースのオトコだったし　更に頻繁に母親の元へ通うオトコに風子は　不満を通り越して嫌悪感だけが膨らんでゆくのだった。

風子にとっては家に居られるよりも　そのほうが気分的に楽だったからそれで良かったんだけど。

出産は高齢出産だったにも拘らず　陣痛から出産まで5時間というスピードで安産だった。

シンイチは出産時に立ち会う事なく出勤し　連絡されてからのんびりと病院に来るといように赤ん坊には全然興味を示さなかった。

出産後3ヶ月で　風子は離婚した。

勿論子どもは風子が引き取った。

あんなマザコンオトコに子どもは任せられません。

「いらっしやいませ!。」

風子の明るい声が響く。

シンイチと離婚してからはや5年。風子はドラッグストアに薬剤師として勤務している。

シンイチとの子どもは女の子で名前はメグ。保育園に通っている。

メグはボーイッシュで元気な子だった。

まだ父親の事を自分から尋ねたりしない。ただ、時折保育園に迎えに来るお友だちのお父さんを　じっと見ている事があるので　そのうちに話さなければならぬ時期が来るかもしれないけれども、風子としては　シンイチの事はもう自分の記憶から抹消してしまっているのです。そのまま尋ねられなければ　そのままにしておこうと思うのが正直な気持ちだった。

風子は後ろを振り向かないタイプのオンナだった。

風子は実家近くのマンションにメグとふたりで暮らしている。

離婚の時の取り決めであった養育費　月3万円の支払いは最初の1年だけで　その後は支払われていない。お金のことよりも　風子は　シンイチの父親としての責任のなさを子どもに知られるのが不憫であった。

だから風子は連絡をとって請求する気はさらさらなくこのまま父親不明にしてしまおうと心に決めたのだった。

メグと暮らす毎日は忙しいけれども楽しい事がいっぱいあった。

それでも夜になると寂寥感に苛まれるのだった。

45歳の風子はこのまま一人身で朽ちていくのは嫌だった。

自分をオンナとして見て支えてくれるオトコに傍に居て欲しいと心から思っていた。

だが、この年になると人との出会いの場は殆どない。

身近にいるオトコはもう家庭持ちなのだ。

オトコはエネルギーを大きく使う離婚をしてまで新たな恋愛を選び採ることは決してしない。

だから極力 妻以外のオンナとは真っ直ぐ目を合わそうとしないのだ。

もし視線を絡めて恋愛に発展したら面倒なことになると 本能的に

避けているふしがある。

「そう、こんな世の中だもの　もしかすると離婚したばかりの　自分と同じ寂しがりやのオトコがきつと居る筈だわ。」

だから風子は　どこで出会いがあってもいい様にばっちり化粧しおしゃれして　颯爽と軽快に通勤するのだ。

通勤の市電の運転手さんにも　にっこりと微笑んでいる風子がいた。

「幸せは待ってても手に入らないのよ!」

終わり

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0049m/>

結婚依存症の女

2011年10月7日10時43分発行